ことばを　そっと　おしひらく

——9 月から 10 月の間に出会った詩

青木由弥子

今月は、美しい表紙、インパクトのある表紙が印象的な詩集が多数届いた。実りの秋、詩集公刊ラッシュの秋、でもある。書影と共に紹介していきたい。

まずは、ベテラン詩人、**黒岩隆**の**『青蚊帳』**から。詩集全体、言葉や行間のはしばしに浅葱から濃紺までのグラデーションがしみわたっている。その中にふっと、灯がともるように置かれた、ミモザ色の華やかさ。〈浅い夢の横で／空き缶の転がる音がする・・・暗くて寒い夜明けだ・・・揺れる／水仙／白いひかりの　一掴み／写真のなかで／ミモザ色のセーターを着て／静かに笑っているひと〉（「**空き缶の朝**」）木下夕爾の「なのはな色」を思い浮かべつつ、ミモザ、というとより檸檬色の強い、垢ぬけた明るさを感じる。〈一掴み〉という一語の固さ、重さ。続いて置かれた「**臼杵摩崖仏**」の、桔梗の青、紫の間を駆け抜けていく渓流の白。〈盛り上がり／砕け／漲り／堕ち／鎮まり／岸辺の桔梗を／魂の落款のように映し／渓流は　参道を下っていた〉〈蜩の声に責められ／渓流を見詰めていると／水面に／微笑むあなたの顔が／額が　鼻が　唇が／みるみる水から浮き出てくる〉自らと掛けているのだろうか。しかし面影は、すぐにまた水に沈んでしまう。〈とくとくと／夢の中を流れる渓流に／指を差し入れ／星霜かけて／あなたを一体　削り出そう〉〈風に揺れる桔梗には／あなたもわたしも／水のうちそと／どこにでもいるのだけれど〉水の中から浮かび上がる、慈愛に満ちた摩崖仏のようなかんばせ・・・それは、急逝したという母の面影を宿しているのかもしれないが、具体的な像というよりは、〈あなた〉としか呼びえない大きな姿に変化している。烈しく流れる水が、ひとつの境界、ひとつの結界を作りだし、その境は生と死を厳然と分けつつも、折々に、触れあう域として作者の前に現れる。

表題作の「**青蚊帳**」は、まだクーラーが必要ではなかった頃の夏の夕刻、そして夜の風の涼しさがまだ生きていた頃の新鮮な思い出が、生き生きと再現されている。ここでは引用しないが、「**海浜電車**」などの作品の中に顕著な、空間の二重構造・・・自身を包み込む世界、それをまたさらに包み込む天や空の気配が、濃厚に現れている一作でもある。

青蚊帳

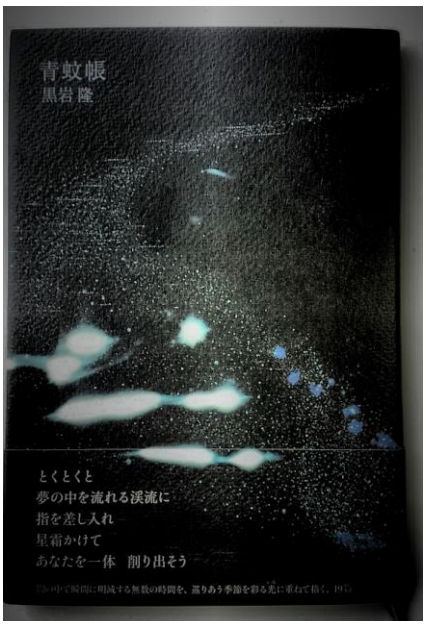
蚊帳って
シェルターだね
夏になると
日本中　蚊帳を吊って寝たものさ
蚊や蛾やカナブンの猛攻に耐えたんだ

晴れた日の夕方
蟬の幼虫が　初めて地上に出て
庭の桐の木を登り始める
坊やは　これを捕まえて
蚊帳の内側にとまらせた
　深夜
始まったのさ　羽化が
割れた背から
柔らかい翡翠色の羽がゆっくりと伸びて

朝の蚊帳のなかで
青空って案外狭いんだと
蟬は思っている

地上の人間たちも
ひりひり
大気という巨大な蚊帳のなかで
羽化したんだ
うすいうすい希望という羽を伸ばし
降り注ぐ流星や紫外線に耐えて

誰が蚊帳に入れたって？
　聴こえるだろ
寄せては返す波の音
空を渡る風の音
あの　大きな子供の寝息なのさ



詩誌**『狼』３１号、光冨郁埜**の**「白く、耀く布地に銀の鋏を落とす」**も、色彩の残響が美しく印象に残る作品だった。

白く、耀く布地に銀の鋏を落とす

白く、たたずむ男に
だれも見ようともしない午後
父は壁の影となり
母はシーツを裂く鋏となった
食器も置かれていない、空の食卓にむかい
だれもいないのに、食器の形が残され
手のひらを、天に向けひろげている
その空白と、沈黙を繰り返し

一連目。白々とした光の中に、男が立っている。明るい霧の中なのか、それとも、空白の心を抱えているのか。父は影として、とけこむように（おそらくは白い壁に）消え、母は〈シーツを裂く鋏となった〉。白く清潔なひろがりとして、夜毎に体を包むもの。家族を守る布、と言ってもよい。そのシーツを裂く、という厳しさに、思わず身構える。壁に映る自身の影に、父の影を重ねているのかもしれない。父と母が、現在の〈自分〉と〈妻〉に重なっていく。〈空の食卓〉は、からの、と読むのであろうけれども・・・宮沢賢治の「兜率の天の食（じき）」ではないが、そらの、と読みたくなるような、死者たちの食卓を思わせる神秘性を帯びている。

白をめくり　布を切り
黒をめくり　カードをならべ
その中から妻を占うカードを引きあてる
・逆五芒星の円盤の配置の絵
――〈Worry〉

白く、シーツに銀の鋏が光をおとす
置き忘れた緑の鋏の代りに
ものごとを、ていねいに陰の襞に折りたたみ

二連目、三連目。〈～めくり／切り／めくり／ならべ〉心地よく響く音の流れ。冒頭に広がる白い空間、白いシーツのイメージを、切り裂くと現れる黒のイメージ。その黒に留まる

ことなく、語り手は淡々とその黒をめくり、タロットカードをならべていく。引き当てた〈Worry〉の意味するものは、なんだろう。銀の鋏と緑の鋏の残像は、氷をまとい光を鋭く撥ね返す冬の小枝――死のイメージと、息吹に満ちた春夏の小枝――生のイメージを喚起する。〈ていねいに陰の襞に折り〉たたまれ、仕舞われる・・・隠されるものは、何だろう。続く連を引く。

生きている形を、うばわれ
輪郭をうしない、いなくなったひとは
どこに行ったのかと、あたりを心配して見てまわり
灰すら風でどこかへ運ばれてしまい
自分のことをわすれてしまっても
慈しみや、悔やみのことばをかける
その、喉と舌さえ、すでになく

影となった父、形見のような「鋏」になった母の気配が、濃厚に漂う。〈うばわれ〉〈うしない〉〈いなくなった〉のみならず、〈灰すら〉どこかへ吹き散らされていく空虚。せめて声だけでもと願う、〈その、喉と舌さえ、すでになく〉この喪失の深さが、冒頭の男が佇んでいる場の白さ、なのだろう。白と銀、そして黒。モノトーンの冬景色のような世界ではあるが、ひらがなの柔らかさの故だろうか、凍てついた氷の大地の厳しさよりも、白い綿帽子に包まれた平野のイメージが漂う。続きを読む。

白く、鈴が鳴る雨の夜に
まっすぐみる、その目に
男と妻のけだるさに
窓のそとの、丘に陽が落ちていく
茨をからめた香の匂い
沼となり、地によどみ
紺色の海に、赤く灯る雪がふりそそぐ

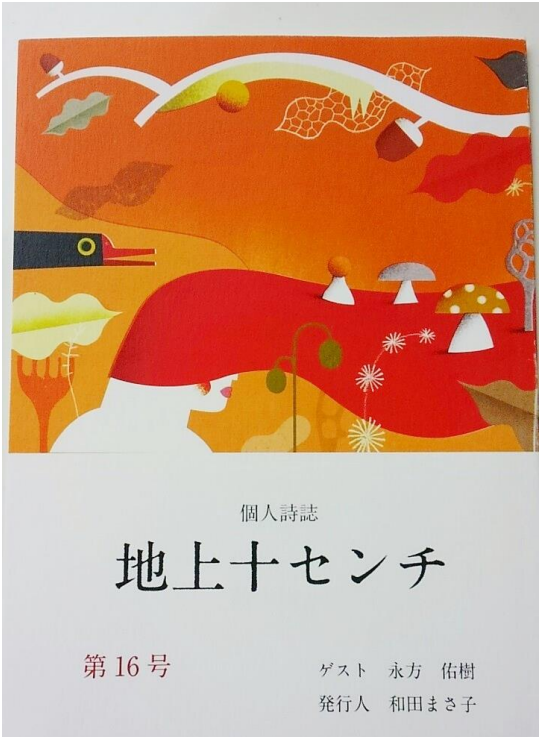
すずがなる／まっすぐみる、あめのよるに／そのめに、かすかに言葉が響きあう空間に、イメージの中で鈴の音が鳴る。神事などでしばしば邪気を払うように、あるいは魂呼びするように鈴を振るが、鈴の音が立ち上げる空間に、雨が降る。空間を遮蔽するように降る雨、みそぎのように空間を湿らせる雨。モノトーンの丘を夕陽が赤く染め、〈茨をからめた香の匂い〉が儀式めいた空間を満たし・・・すべては沼のように夜陰へと溶解し紺色の海が広がっていく。そこに、赤く照り返しを受けた雪がふりそそぐ。

男がたたずむことに
だれも話しかけようともしない午後
あるひとは口をつぐみ
あるひとたちは、にぎわいながら
ゆっくりと草地が翳りにつつまれる

自分を占うカードを引き出す
・幹の葉に守られた８の花弁
――〈Prudence〉

風が窓を叩く
その夜を迎える妻の
ゆううつな微笑みに、
白く、耀く布地に銀の鋏を落とす

ロンドのように再び冒頭の、白い空間に佇む男の景を呼び戻しつつ、午後の陽は夜へと傾いている。日常に兆す不安といった具体的な景ではなく、より深遠な、死者と生者が交錯する非現実のあわい、その暮れ方に立っている人の視界に立ち会っているような、不思議な印象を残す残影の中に置かれる、Prudence、気持ちを引き締めるようなカード。銀の鋏のインパクトで締められる終行は、妻の「心配」を夫の「深慮」で拭い去るような、覚悟を秘めた静けさを感じさせる。



日常の中で世界の仕組みにふと気づく瞬間を描きとめた「青蚊帳」、冒頭から異界へと読者を誘っていく「白く、耀く布地に銀の鋏を落とす」に続いて紹介するのは、日常の中で異相が垣間見える瞬間に着目した、細やかな感性が光る作品である。

和田まさ子が発行している個人誌**『地上十センチ』**。世界的な評価を得ている画家（童画家）フィリップ・ジョルダーノによる鮮やかな装画の美しさに、毎号、息を飲む。ゲストの詩一篇と、和田の詩が三篇掲載されている。いずれも日常に重層的に重なっている異相に触れていくような作品だが、ここでは和田の詩から一篇を引く。

御茶の水を降りてゆく

だれのために
何をするのか
ほら、もう
わからなくなっている
御茶ノ水駅前のスクランブル交差点
小雨のなかに夏の光が混じり
広場の小島をきらめかせ
祝福された聖地のようにしている
信号が青に変わると
人が鉄砲水のようになだれ込んで行く
まっすぐ行くのか
斜めに進むのか
とっさにからだが鉄板になって
激しく衝突する

あいさつの仕方がわからなくて
すぐ喧嘩になる機械がはめ込まれたので
敏感に作動するのだ

一連目、二連目を引いた。丁寧な描写によって現前に立ち上がる御茶ノ水駅前の情景。そこに、〈とっさにからだが鉄板になって〉という、意表をついた、しかし極めて具体的で実感の伝わる比喩が飛び込んでくる。身体的にとらえた「実感」を、さらに和田は〈すぐ喧嘩になる機械がはめ込まれた〉とユーモアたっぷりに「了解」する。そうか、〈あいさつの仕方〉がわからない、あるいは忘れた時、人は機械になるのか・・・そういえば、挨拶は、禅で最も大切にされる他者との関わり方であった。

見つからないように
紛れ込んで
用事のある人の真似をして
腕時計なんかを見たり
ポケットのなかを探ることもしてみた
どこにいくというあてのないことが
露呈しないために

どんなことだってやる

ウクレレ、ギター、バイオリンの店から
流れてくる曲が
都市に陰影をつくり
つまりは
あてどころのなさを深めるのだ

雨がやんだ
折り畳み傘が
折れたがっている
雨上がりでなくとも
いつも何かを折っているわたしたち
弱い、大切なものまで折って
激しく後悔するたびに
手のひらが荒れる

いいたいことの半分もいえないから
本屋街は沈んでいる
急かされるように
肩をこわばらせ
神保町へと
ずりずり
せかいの谷間に降りてゆく

「用事」に追いたてられ、どこか殺気立った、しかし「目的」を持って迷わずに歩いている、ように見える人々。もちろん、そうでない人もいるに相違ないが、人生の途上で、〈だれのために／何をするのか〉見失っている（あるいは、そもそも見いだせずにいる）語り手にとっては、そんな「多忙」な人々がまぶしく映る。彼らの行く手を邪魔しないように、そんな「配慮」も働いているのかもしれない。目的なくそぞろ歩くことの頼りなさ、あるいは「うしろめたさ」に類した感情。〈用事のある人〉の真似をして、行く先の宛てがある「ふり」をしながら、折りたたみ傘を〈折る〉という行為に、膝を折る、心が折れる、他者に折れる・・・そんな異相を重ねていく。〈弱い、大切なものまで折って〉どこに行こうというのだろう。〈手のひらが荒れる〉これは、家事に従事している女性には、特に実感のある表現かもしれない。ものを洗う、洗い流す、という行為に、気持ちの澱を洗い流す行

為が重なる。洗いたくても洗い流せない、後悔や関係性。結局は自分が「折れる」ことで収めつつも、〈いいたいことの半分もいえない〉まま、〈沈んでいる〉本屋街に〈肩をこわばらせ〉たまま、〈ずりずり〉〈せかいの谷間に降りてゆく〉。まるで地の底に降りていくような、あるいは蟻地獄に引きこまれていくような描写だが・・・そこに、緊張を解いてくれるもの、「わたし」を解放してくれるもの、異界へのエクスカーションを橋渡ししてくれるもの、があるのではないか。そんな期待を託しているに相違ない。

〈いいたいことの半分もいえないから〉書くしかない、のかもしれない。イレギュラーだが、**橋本シオン**の第一詩集、**『これがわたしのふつうです』**は、まず「あとがき」から紹介したい。紫は「あとがき」、青は本文からの引用である。

二十歳から東京にやってきて、それくらいから病気になって、東京も病気も七、八年の付き合いになってしまった。社会に馴染めないからそのうち抹消されるか自滅するしか道はないと思っていたけど、リビングデッドで生きながらえて、やっぱり結局死んでいるのと一緒なのかもしれない。
そういう心を、どうにか吐き出したくて、残された手段が書くことだった・・・社会にも東京にも居場所がないと被害妄想で武装した私が、死にながら生きるために、私はふつうだと許しを乞うために、書いた・・・

東京
わたしは気付いた。東京には不安の種しか落ちていない。みんながみんな、不安の種をばらまいて牽制しあっているだけ。どの家にも沢山の種が床や畳の隙間、排水溝やタッパの中にあって、みんなぼりぼり食って、そのくせ育てたりなんかしない。

わたしの不安の種は燃えている。海沿いの町でひっそりお母さんとお父さんと生活しているときは、こんなもの無かったはずなのに（中略）東京はひとりの街だ。そのくせ眠ることをしらない。食うだけ食って排泄して、そのくせ寝ない。性交渉はいっちょ前にするくせに、眠ることをしらない。三大欲求のひとつが欠けてしまうだけで、こんなにも均衡は危うい。

燃えている。胸で燃えている。足の裏から燃えている。シャワーを浴びても消せやしない。海沿いの町だけがくっきりと浮かんでくる。鉄塔の建つお母さんとお父さんがいるあの町が、ただ恋しい。でも、胸にごろごろと居つくこの種のせいで、もう戻れない。
（中略）
本当は一つになりたい。目の前で病気をむさぼるあなたと、それからお母さん。欲張りと

いわれてもいい、もう戻ることができないなら、この二人とひとつになりたい。一生種からは芽が出ないから。

いちといちをに、にせず、燃やした。不可視の不可能を燃やした。不安の種と燃やしたい。でも、隙間の街のうつ病患者と海沿いの町のちっぽけなお母さん、あなたたちはわたしがいるから大丈夫よ。

バン、と三回、音が鳴ったら視界は終わる。大丈夫、苦しくない。終われば、そのうち全部綺麗に無くなる。消滅じゃない。新たなはじまりの模索だと、わたしは泣きながら不安の種を食っている。不安の夜に。

あなたたち、とわたし、三人の人物が描かれているようにも見えるが、書く主体である「わたし」と、「うつ病患者」のわたし、そして「お母さん」の「三人」とも取れる。書く、ことによって「大丈夫」という強さを手に入れた「わたし」が、そこにいる。もう一作。

マトモイズ

小学生のわたしにタイムリープするか。それとも中学のわたしがタイムリープしてくるか。MATOMO IS JUSTICE、マトモ・イズ・ジャスティス、口々に言いあって転がるトーキョーのマトモはイズ・ジャスティス。この間ハゲの親父とセックスしたんだけど還暦のちんこの色ってすごいよ、この会話から読み取るトーキョーへのジャスティス。
（中略）
マトモなんて言葉、ムテキのトーキョーには意味がない、どちらかと言えばマトモを犯して腰をふるいめいじだよ。歌舞伎町でドレスをたなびかせて穴を掘るトーキョーのトライブが、酒をしこたま飲みながらトーキョータワーを煽って、そこに本性は現れないから実は血なんてイチミリも流れていない、この事実の中に隠れる MATOMO こそが JUSTICE。

詩集前半には、**「鉄塔の真下、のいちごのカクテル」**という行分けの長編詩が収められている。歌謡、いや、演歌的と呼んでもよいかもしれない、甘さと苦さを含んだ物語詩。〈何かから逃げてきた〉〈母と娘のための〉家は、〈海が近いわけでもないのに／磯の匂い／あふれてとまらない／満たされる羊水だと／小さな頭で娘は思い〉そんな、母胎に守られているような庇護される場であり、同時に〈大人でも子供でもない娘にとって／鉄塔の真下／四畳半の家は／なんだかとても／窮屈に思えてならない〉場でもある。

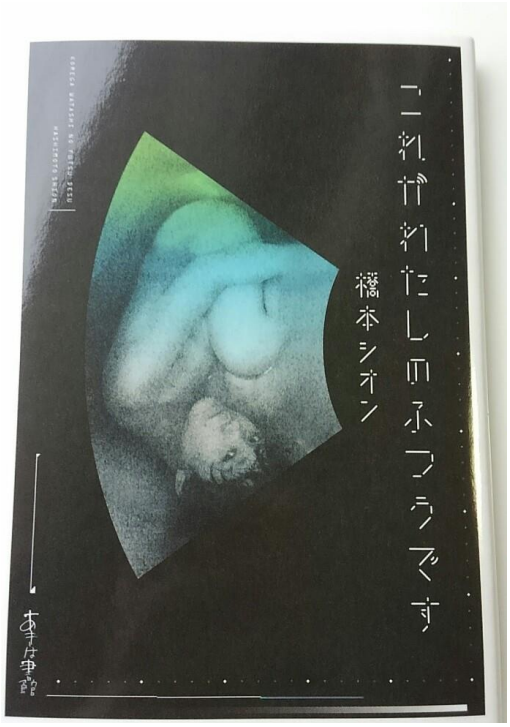
〈東京〉への、憧れ。〈その頃母は／帰りの遅い娘を心配しながら／貝をていねいに湯がいていた／磯の香りが充満する四畳半で／貧相な食事／それでもここまで育ってくれた娘に／感謝をしながら〉〈小屋の下に群生する／名前も知らない小さな貝たちを／母は爪がは

がれるのも気にせず／がりがり　がりがり〉はがして、それを湯がいて食べさせる、という。貝は、具体的な事物でありながら、同時に寓意でもある。そういえば、貝、特にタカラガイは、古来、貨幣の代りであった。〈朝昼夜と繰り返される／この貝との葛藤に／娘はとうに嫌気がさしているのに／母はなぜこんなところから離れないのか〉

身を粉にして生活の糧を得る母と、東京に憧れ、煙草を覚え、酒、性、〈極彩色の油絵みたいな／脳内色彩〉を与えてくれる刺激を求める娘。

いささか定番の物語とも言えるが、揺れながら物語る歌の流れは、「定番」を突き抜けて胸に切々と迫るものがある。

〈娘と過ごしていたという／事実だけが残る／小さな家の中の／娘と眠っていた／せんべい布団の上で／まるく／横になっていた〉母の姿は、〈きしむ背骨をまるめて／血がにじむ指先を／くわえる姿は／胎児のよう〉だと述べるに至って、表紙のインパクトある写真を思い出す。



妊婦なら誰でも見たことのある、検診の際の超音波撮影による胎児の写真。

母と娘が、胎児という姿に置いて重なり合う。

ベテラン詩人、**柴田三吉**の二人誌『**Junction**』104 号でも、老いた母が歌われていた。柴田の詩を一篇、紹介しておきたい。

発酵する朝

頬が大事だ
てのひらでも耳たぶでもなく

頬のやわらかさに見合って
ことばは
まどかになる

ひねもす遠浅の海に身をひたし
ことば少なくなったけれど
母よ

あなたの頬はいつしか
とてもやわらかくなった

（かつて張りつめていた頬を疎ましく思
　う日々もあったが　そのとき　わたし
　の頬はさらに頑なだったのだろう）

イースト菌がふっくら発酵する朝

対の入れ歯を洗面台にそろえ
無心に空洞を磨いている
あなた

鏡のなかのわたしに
おはようと言う

しゃぼん玉のようなものを
唇の端にふくらませて

余計な解説はいらないだろう。はからずも「海」のイメージが登場するが、母と子（ここでは息子）との間の葛藤は既に遠い日の出来事となり、頬のやわらかさ、ことばの「まどかさ」が、やさしい時間を育んでいく。

人と人との間に流れる時間は、記憶の中にしかとどめることができない。しかし、その時の思いを形に残すことはできる。山梨県のクリスタルミュージアムで行われた**「詩の朗読カフェ　秋のクラムボン 2017」**の記念冊子が届けられた。ゲストの**宮尾節子**、県外を含む 40 名近い参加者による充実した冊子である。集中、「合同詩」が三篇掲載されている。ユニークな試みだったので、主催者の**中村みゆき**に創作過程をお尋ねした。第 4 回の**「ここから」**は、2 月 11 日に参加者 21 名によって編まれた。この時のタイトル（テーマ）は主催者側が用意したとのことだが、第 5 回の**「そこから　ぼむくら　つめたい夏」**（6 月 10 日、参加者 22 名）は、参加者側から提示されたテーマだという。二篇とも、タイトルからイメージする一行を参加者に提出してもらい、意見を出し合いながら順番を考えて繋いでいった。第 6 回（9 月 16 日）**「秋のクラムボン 2017 一行連詩」**は、参加者 31 名。タイトルの**「わたしたちの星座　つながる星　つながる詩」**は、ゲストと主催者とで考えたという。最初の一行目を**中村みゆき**、最後の一行を**宮尾節子**が記し、当日提示。間に参加

者が記した一行の短冊を置いて行く形で作り上げられた。前からつなぐだけではなく、後ろから、途中から、といった置き方もあったというから楽しい。

わたしたちの星座　つながる星　つながる詩

どこから来た風なのだろう　夕暮れの中
この匂いを覚えてる　物憂い色したあの星の
この響きを愛している
つながりを求めて光る星
手をつなぐ星々も軌道という名の円を描き
赤い光にひかれるサソリ座の私

勝利の一言よりも克服の一言よりも、大切なのは活き活きと生活して行く事だ
箱の中に 2LDK、あしうらからやって来て　鼻腔で中性子が集まって何事か話してる
寄ってけし寄ってけし　声の主を捜して見上げてる
立ち上がるゆうきとともにリズムの流れ
雨降る空の彼方に星はまたたく
繰り返したまばたきの隙間
不意に降り出した雨は星のライスシャワーのようで
狂っていく音程の輝きの交差点
星々のひそやかなつぶやきにみみをすませよう

何　思っているの…ウフフ…内緒・ナイショ。あのね…カラス…ウフフフ
ぼくはずっと待っている　君が泣きやむまで…
水は枯れることなくあふれ続ける
水の星に今は水無く
星が私か　私が星か
どうしてかしら
氷河の縁（へり）で袖を次々に切っていった

道祖神サマ　こんばんは
気まぐれ夜風に酒がうまい
いつだって、いつだって、貴方がみていた
宙空に引かれた放物線は
あの星に願いを　立ち止まらずに

あなたに出逢う為に
なつかしい虹をさがして
まぁ　やれんじゃないかな
ぶつけたのはグラスの縁だよ大丈夫、今日に乾杯！

最後に、インターネット投稿サイト Breview　https://www.breview.org/　で出会った、夏の終りに相応しい詩を。10 月 1 日に投稿された、深尾貞一郎の作品。掲示板上で記した私のコメントと共に、紹介したい。作品は青文字、私のコメントは緑で示しておく。

記憶

高い、空は、
海に浮いた、油のよう。
熱の
残る路に、トンボが、ポッと落ちる。
オニヤンマの複眼に残る、
うねりを帯びた敏捷さで、
丸い小金虫らが、クヌギの老木に群れる。
ふりむいたお母さんが、
四枚の薄羽根をひとつまみに、笑う。
僕はオニヤンマの歯ぎしりしている牙を凝視する。
鮮やかな黄色の胸の浮き出た筋肉は、
森の静寂さを気づかせる。
免疫細胞のように虹は
水銀や、コバルトブルーを食べる。
虹は、今、炎になった。
目をつむれば、
ピンク色をした、バスタブの排水口のイメージ、
ステンレス製のぎらぎらと光る縁取りから、深淵が覗けた。
オニヤンマの複眼に残る、
うねりを帯びた敏捷さで、
丸い小金虫らが、クヌギの老木に群れる。
トンボの、輝きに触れたくて
紙飛行機のように、空にかざす。
心に、

はじけるものがあり、樹液を
手につけて、
匂いを部屋に持ち帰ろうと、思う。
とり残されてしまった気がするから、
今はもう、道路脇の縁石の上、
ステップを踏みながら、唐突に、
走り出す。坂を越えて、
シャボン玉の内側に、この世はあって、
川を越えて。ぶーうぅーん。
空は頭上にだけあって、木々の隙間に刺しこむ虹に
向けて、群れは飛んだ。ぶーうぅーん、ぶーうぅーん。
ざわめく、アメジスト色が、
無数に映つる
太陽は、どこを探しても見当たらず、
空全体が、夕暮れのように、
羽音と、発光している。
羽音が、

句読点を多用した、ぼつぼつと切るような、力強いリズム、冒頭の丁寧な自然描写、そして、その後の飛躍。ユニークな作品だと思いました。

「お母さん」と書いている所を見ると、語り手はまだ少年の設定でしょうか。その母が、無造作にトンボの薄羽をつまんで、息子の鼻先に突きつける。オニヤンマの胸の筋肉、クローズアップされる牙、そして〈森の静寂さを気づかせる。〉獲物を取る肉食の昆虫の持つ迫力、動の美とでもいうのでしょうか、豹が獲物を狙う前の静けさとか、獲物に狙い定める猛禽の静けさ、とか・・・単純な静けさではなく、たわめた鋼を抑え込んでいるような、そんな緊迫した力を秘めている静けさ、を感じます。

高い空、大きな視野から始まって、トンボが落ちる、という、まだ距離のある情景、そこから一気にクローズアップしていくところ（母親が、オニヤンマをつかまえる無造作な動きの中に潜む残酷さのようなものに、敏感に反応する息子の視点も現れているかもしれません）〈免疫細胞のように虹は 水銀や、コバルトブルーを食べる。〉
ここからの飛躍が素晴らしいですね。
〈ピンク色をした、バスタブの排水口のイメージ、 ステンレス製のぎらぎらと光る縁取りから、深淵が覗けた。〉

喰うものと喰われるもの、その間に存在する緊張感。〈オニヤンマの複眼に残る、／うねりを帯びた敏捷さ　〉が 色を喰らって炎となって燃える虹の中にも、どこか肉感的な不気味さもある〈バスタブの排水口〉の中にも、見出される〈うねりを帯びた敏捷さ〉と同質のなにか。
〈シャボン玉の内側に、この世はあって、〉壊れやすいシャボン玉の内側にある、この世・・・という認識。シャボン玉の虹色と、先ほどの虹が響きあっていることを、この時点で知る、わけですが・・・樹液を手に付けて持ち帰ろう、という少年の思いと、樹液を吸うコガネムシに自己同化していく眼差し、そのまま虫になって〈ぶーうぅーん。〉と飛ぶ群れの中に、自分自身も混ざっていくような、混然とした感覚、最後まで響く〈羽音〉・・・ 幾層にも折り込まれながら、オニヤンマの複眼に宿るある種の力、喰うものと喰われるもの（死に喰われる人間、も含めて）の関係性、自在に虫の気持ちになって空を飛び回るような少年期の想い・・・夕刻の〈アメジスト色〉に照らされている、記憶。
映つる、など、表記の疑問がありますが、よく練り上げられた秀作だと思いました。